

オンライン講座 日本史をにぎわせた女性たち II

テーマ : 「才女の秘めた悲しみ 清少納言」

日時 : 2022年 6月 14日

講師 : 林 和清 先生

当日参加受講生: 20名 (在籍 30名) 再視聴あり

講義前に第2回「伊勢」に寄せられた質問にお答えいただきました。(下記の他に数件の Q&A がありました)

Q: 宮中での宮仕えの具体的な仕事内容とは?

A: ①宮中の儀式を取り仕切る ②陳情に来た人びとの話を取次ぐ ③歌会を取り仕切ること、その際の楽器演奏
④なかでも重要な仕事は装束を仕立てること…染色・デザイン・縫製などすべて。多くの仕事が求められました。

清少納言は枕草子の作者として、作品を通して「はっきりともの言う皮肉屋さん」と評価されることも多いようですが…。今回、林先生からは清少納言の知性溢れる歌と中宮定子様への深い想いを中心にお話しいただきました。

経歴

和歌や漢学に秀でた親族に囲まれ、恵まれた環境下に成人。981年ごろ武勇に秀でた橘 則光と結婚し、男児をもうけたのち離別します。993年に一条天皇の中宮定子のもとに出仕し約10年間女房として務め才能を発揮しますが、中宮の父藤原道隆没後、政権は藤原道長に移り、中宮の兄弟も左遷されます。失意の中宮を支え、励ますため「枕草子」の執筆を始めます。没年不詳ですが、京都「泉涌寺」に歌碑があり、ロケションで紹介頂きました。(右と下: 東山月の輪にある泉涌寺にて)



作品

しみじみとした恋の歌や季節の花に託した物思いの歌よりも、中国の故事を題材に男性と丁々発止のやり取りをする歌が得意でした。

「孟嘗君は鳥の鳴きまねで朝になったことを告げさせ、函谷関という城門を開錠させた」という中国故事に材をとり、よまれた歌

百人一首 夜をこめて鳥の空音^{そらね}はかかるとも世に逢坂の関はゆるさじ

心かしこき関守待るめりと聞ゆ

意味: 夜通し孟嘗君の鳥のように鳴きまねをしても、逢坂の関守はだまされません。私も戸を開けてあなたに会ったりしませんよ。

中宮定子様への献身と忠義

父・藤原道隆死去のあと実家が没落し、涙にくれる中宮様を慰めるために書かれた「枕草子」はユーモアにあふれた明るい話題で始まりますが、あとがきでは、もう失われた定子様との思い出が遠くなるさみしさが記

されています。定子様が第3子の出産後に命を落とされた後、一周忌までは遺児のため宮中に留まりますが、その後藤原棟世と再婚し死別。晩年を過ごした泉涌寺の裏山には中宮様の鳥戸野御陵があり、死後も中宮様の冥福を祈り墓守をつとめていたと言われています。

(担当 口村)

